

文部省選定
芸術祭優秀賞

毎日映画コンクール教育文化映画賞
日本産業映画賞

伝統工芸の名匠

芭蕉布を織る女たち

—— 連帯の手わざ ——



芭蕉布について

芭蕉布は、糸芭蕉の繊維を糸にして織った布で、軽くてさらりとした肌ざわりは、南国の着物として古くから人々に愛された。しかし、現在では沖縄県国頭郡大宜味村喜如嘉で製作されているほかは、殆んど見られなくなった貴重な織物である。

喜如嘉の芭蕉布は、テカチ染、琉球藍染、木灰、白米粉・白芋などすべて天然の材料を用い、糸芭蕉の栽培から織物の完成まで一貫して手仕事で行われ、しかも多数の人々の協力で製作されている。

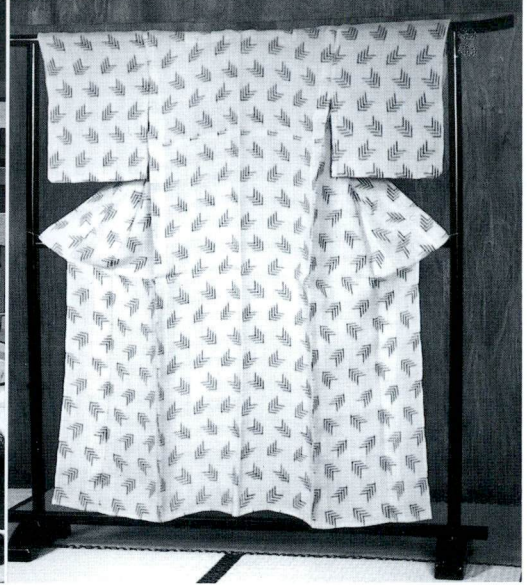
代表者の平良敏子さんは、戦後殆んど省みられなくなっていた芭蕉布の技術の伝承と復興に努め、多数の後継者を養成して今日に至っている。



沖縄・喜如嘉の芭蕉布は、現在でも手結緋の伝統技法を守っているこの喜如嘉の芭蕉布が途絶えることなく、現在にまで育てあげるためには、喜如嘉に生まれ、芭蕉布織りの生活の中で育ち、芭蕉布に一生を賭けようという情熱をもった女性達が必要であった。

この映画は、昭和49年、重要無形文化財の総合指定となった「喜如嘉の芭蕉布工房」の強い連帯感が織りなす手わざを紹介する。

・芭蕉布は、かつて沖縄の夏の衣料として親しまれていたが、太平洋戦争を境にほとんど亡びてしまった。それが戦後、かつての主要な産地の一つであった喜如嘉で見事に復興していた。そして、この芭蕉布の復興と発展に全身全霊を捧げてきたのが「芭蕉布工房」の指導者、平良敏子さん、その人である。



・平良さんは、昔から芭蕉布を織ることが女の努めであり、喜びであり、誇りでもあったという喜如嘉で、子供の頃から機の音を聞いて育った。平良さんが、芭蕉布に生涯を捧げるきっかけは、娘ざかりの昭和19年、女子挺身隊の一員として倉敷の航空機製作所に行き、そこでの倉敷レーヨンの故大原総一郎社長との出逢いであった。

大原社長は、沖縄の文化が戦争で亡んでしまうのを惜み、日本民芸協会の外村吉之介氏を招いて、沖縄からきた娘たちに沖縄織物のよさを学ばせ、工房を与えて機を織らせてくれたのである。それから約1年後、沖縄へ帰れることになったとき、大原・外村両氏から「沖縄に帰ったら、沖縄の織物を守り育ててほしい」と励まされた。

戦後も幸い喜如嘉だけは芭蕉布の原料である糸芭蕉の畑がたくさん残っていた。また、村の人々も、芭蕉布に対して変わらぬ限りない愛情と愛着心を持ちつづけていたのである。多くの障害を克服しながら村をあげての産業として芭蕉布が守り、育てられてきた。

平良さんの絶ゆまぬ努力と穏やかな人柄、それを支え、おしめない協力をしてきた「喜如嘉の芭蕉布工房」の女性達。

糸芭蕉の栽培、糸づくり、緋くくり、染色、織り、仕上げと一貫して根気よく行なわれる共同作業。芭蕉布は一人ではできない共同の作品である。その連帯感の底にあるものは、この喜如嘉の土地柄、心のやさしさである。

喜如嘉の芭蕉布には、作者の名がない。もちろん平良敏子作品も存在しない。芭蕉布は、連帯の手わざが生み出す連帯の作品なのである



作 品 名・シリーズ 〈伝統工芸の名匠〉
連帯の手わざ「芭蕉布を織る女たち」
(35mm/カラー/30分)

企 画 製 作：財団法人ポーラ伝統文化振興財団

製 作 協 力：株式会社桜映画社

監 修・岡田 譲

製 作・村山和雄

脚本・監督・村山英治

撮 影・金山富男 録 音・甲藤 勇

音 楽・山内 忠 ナレーター・加藤治子

協 力：文化庁文化財保護部 沖縄県立博物館
沖縄県教育庁 沖縄県大宜味村

Pola Foundation for the Promotion of Traditional Japanese Culture

財団法人ポーラ伝統文化振興財団

〒141-0031 東京都品川区西五反田2-2-10 ポーラ第2五反田ビル2階
TEL.03-3494-7653 FAX.03-3494-7597